

反企業意識と若者の準拠集団(Reference group)

岡田 まこと(駒沢大学)
 山川 大次郎(大阪経済大)
 奥 謙 弘(同志社二中)

昨年の発表：集団、ソシアルカテゴリーの側から、主に Control から仮説。(次頁誌表文化研究記事参照)
 今年の発表：行為者個々の側から、主に Merlon から仮説。

反企業意識研究の仮説に有用なのは、マートンの adaptation の理解である。彼は deviation を全て病理現象とみなす立場を否定し、reference group との関連で rebellion(反)をとらえている。

したがって彼の図式と本報告は若干修正する。すなわち、Conformity ~ Retreatism をも、reference g. との関連でとらえる。たとえば、Conformity にし、企業集団以外の世界を知らぬことに起因する“++”と、反企業集団への参照起因する“++”(反企業集団からみれば“--”)とを区別する。

ここに、企業集団と反企業集団が常時 reference group として併存するところから仮定の下にマートンの図式を拡大してみた。(各適応の区別を避けるため、ニョクネームをそれぞれ付す。下表)

	C. Goals	I. means	反企業 の外見		C. Goals	I. means	反企業 の外見
Conformities				Ritualisms			
同調作型	+	+		夏目漱石型	-	+	
帝王型	±	±		永井荷風型	±	±	
近衛首相型	+	±	△	小田実型	+	±	OX
修正資本主義型	+	+	△	モーリス社員型	±	±	
友好商社社員型	+	+		偽装転向作家型	-	+	OX
単純独断転向型	+	+	△	横道改年主義型	+	+	△
Innovations				Retreatisms			
自閉症型	+	-		兼好法師型	+	-	
赤色恐怖苦悶型	±	±		坂口安吾型	±	±	
無気力社員型	+	±		太宰治型	+	±	
社会改良主義型	±	+	△	五月病学生型	±	±	△
インテリ苦悶型	+	+	○	Rebellion	+	+	○

このように整理すると、Cultural Goals Institutional Means の何れかにおいて企業集団に - に反企業集団に + に refer する適応は、若干の他に、形式的に ± ±, ± ±, ± ±, ± ±, ± ±, ± ± 等がある。

形式的に ± を含む適応を、個々にあげ、てみると、その全てが反企業的に現象するわけではない。

また、conformities についても、個々にあげ、てみると、“思想警察に追いまわられそうな”ケースが発見される。意外にも、Retreatism は、一見 rebellion への移行段階であるかのように見えるが、詳細にみると、“五月病学生型”を含むだけで、本質的には反体制とつながらない。

(○：反企業活動に参加する可能性あり。△：本質的には反体制ではないにもかかわらず、アカとみなされたことあり。OX：反企業活動が顕現するケースも顕現しないケースもある)。

企業労務や治安当局：企業集団 C.G. と I.M. に ± ± の若者を、就職試験に際し、格内にかける。そして近衛首相型や修正資本主義型の優秀学生も、アカとみなし、ふるい落していることは多い。

反企業運動側：○も△もい、いよにして、革新派とみなし、運動をすすめていることは多い。選考のたびの人民戦線論。また、無気力学生 (retreatists) も、企業体制の犠牲者などと呼んであげれば、やがて彼らを気力ある反体制活動の同志軍に後援できるかの、幻想に捉えられている。最後に、各適応形態がいかなる階級階層出身の学生、いかなる階級階層の若者に、より一般的であるかを図式化し (個別の検討はそれぞれの適応形態を根拠過程で行った)、昨年の報告との関連の確認をはかる。次頁新聞コピーの空欄に記した表を参照 (第2表)

なお、昨年の報告は、各階級階層ごとに、そのそれぞれに一般的な value, および、そのそれぞれに一般的な、企業や学校に対する理解 (frame of reference) を確認することによ、て、それぞれに一般的な行為を検討する、という方向で、反企業の問題にアプローチしている。

